



町民文芸

只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

わが挽ぎて茹でし枝豆夕食に出せば語らひ常より弾む

吉津 政枝

生家をば改築せしが年重ね帰郷すること少なくなりし

馬場 八智

胃の検診終りて帰る道すがら刈り置く草のしるき匂ひす

渡部ゆき子

雷の音に急げど間に合はず洗濯物より雨水垂るる

目黒 富子

日盛りの舗道を裸足で遊ぶ孫のサンダル持ちて後を追ひかく

渡部ヨリ子

突然の豪雨にわが町襲はれて避難命令の放送流る

新国 洋子

唐突に逝きたる友に驚きの静まらずして弔辞書ききつぐ

五十嵐夏美

長く痛み衰へし甥車椅子に乗せられて母の念仏唱ふ

(出 詠 順)

只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

リウコ

甘酒のうまさに力貰ひけり
杜若余生と言ふは如何なこと

魚みちを浅瀬に造る裸の子
門前に聞く小流れの音涼し

邦 男

康 女

のうのうと紙魚の住み着く大辞典
休耕の畑ぎっしり草茂げる

谷釣りの竿に槐の花こぼる
炎天の日が日をはじくトタン屋根

隆 堂

都

梅雨晴れや皆一斉に走り出す
弟と氷水飲むリボンの子

砂利採りの仮設トイレや行々子
丹精の薔薇切る己が誕生日

邦 夫

一 穂

肩中は母と同じき衣紋竹
陰干しの笹の香りや土用中

夏出水七百ミリや墓消ゆる
ゲリラ豪雨青田余さず川成ぬ

吉 児

洋 子

梅花藻やプクリプクリと独り言
野にありて天蚕深き緑なり

声届く間いの椅子や夏の星
夏出水置き直されし仏の火

笑 羊

敦 子

青山椒パンと叩いて飯ずし漬け
夏休み犬も一緒に里帰り

(馬場惇先生逝く)
秋暑し送りて仰ぐ蒲生岳
秋燕や雲一つなき蒲生岳

恒 夫

礼

長雨の小止みの隙や蝉の声
雨音の時折はげし紫陽花忌